

## 空しさの中で主を仰ぐ

### [聖書]コヘレトの言葉 1章 1~3、2章 10~17 節

エルサレムの王、ダビデの子、コヘレトの言葉。

コヘレトは言う。なんという空しさ なんという空しさ、すべては空しい。

太陽の下、人は労苦するが すべての労苦も何になろう。

目に望ましく映るものは何ひとつ拒まず手に入れ  
どのような快樂をも余さず試みた。どのような労苦をもわたしの心は楽しんだ。それが、  
労苦からわたしが得た分であった。

しかし、わたしは顧みた この手の業、労苦の結果のひとつひとつを。見よ、どれも  
空しく 風を追うようなことであった。太陽の下に、益となるものは何もない。

また、わたしは顧みて 知恵を、狂気と愚かさを見極めようとした。

王の後を継いだ人が 既になされた事を繰り返すのみなら何になろうか。

わたしの見たところでは 光が闇にまさるように、知恵は愚かさにまさる。

賢者の目はその頭に、愚者の歩みは闇に。しかしわたしは知っている  
両者に同じことが起こるのだということ。

わたしはこうつぶやいた。「愚者に起こることは、わたしにも起こる。より賢くなろうと  
するのは無駄だ。」これまた空しい、とわたしは思った。

賢者も愚者も、永遠に記憶されることはない。やがて来る日には、すべて忘れられ  
しまう。賢者も愚者も等しく死ぬとは何ということか。

わたしは生きることをいとう。太陽の下に起こることは、何もかもわたしを苦しめる  
どれもみな空しく、風を追うようなことだ。

### [1] 「空しさ」に捕らえられてしまう私たち

私たちは新型コロナによって大分生活が変わってしまったということがあり  
ますけれど、或る意味私たちはそれに慣れてきているところもあると思うんで  
す。初めの内は「なるべく家から出ないように」と言っていた訳ですが、この頃  
は「Go to travel」（旅行しましょう）とか「Go to eat」（皆で外食しましょ  
う）と盛んに言われます。経済を回したいという思惑も理解出来ないわけではあ  
りませんが、私などは、これでいいのなあと感じてしまいます。

一時期、私たちはかなり危機感を持ち、自分の命や家族の命のことに細心の注  
意を払っていたと思います。それが今少し慣れてきている。悪いことではないの

かもしれません。しかし、私はまた普通の日常に戻ると、人間というのはまた目先のことで精一杯になって、「わたしの命とは何なのか」「私は何によって支えられているのか」という、人間の根源的なことを脇に置いてしまうことになってしまうことになるのではないかと思います。

今日から礼拝では「コヘレトの言葉」を読みます。口語訳では「伝道の手紙」でした。これは、紀元前 3 世紀位の、ユダヤ人の知者と思われる人が王様の名を借りて書いたものではないかと言われます。この手紙は、「人生の儚さ」といったものを直視しています。これは私たち、新型コロナ云々…と言うこと以前に、普通に生きていても、ある瞬間、自分の「生」というものの空しさというものに襲われるということは無いという人はいないのではないかと、思います。

私が最近個人的にもショックを受けたのは、ファンであった女優の竹内結子さんが急死されたことです。まだ 40 歳です。再婚された後も新しいお子さんも生まれて、ご家族は幸せそうでしたと誰もが言うような環境で、(恐らくですが)ご自分から死を選ぶとは本当に驚きであり、悲しいこと、ショックなことです。他にも少し前にはやはり俳優の三浦春馬さん、また芦名星さんが亡くなっています。原因がはっきりしていない。これは特にご遺族にとってどんなに辛いことでしょうか…。ここで私は週刊誌のように色々な詮索をしたいとは思いません。ただ、このように思えて仕方がないのです。それは、もしかしたら、なぜ「死」というものを選んでしまったのか、その理由というものは、本人たちにもよく分からないのではないかと、ということです。傍からはなおさら分からない。ただ、或る時、何かがきっかけになって、深い闇に捕らえられてしまうということ、コヘレトが語るように「すべては空しい」と思ってしまう絶望が自分を襲ってきた、ということなのかも知れないな、と私は思うのです。そしてこのことには、誰も例外がない。これを聖書は語っているのではないのでしょうか。

## [2] 「空しさ」・「絶望」という病

皆様はご存じでしょうか？ あのヤマト運輸の伝説の経営者と言われた小倉昌男さん(2005年に80才で亡くなっている)という方を。この方と奥さんの玲子さんはクリスチャンでした。そのご生涯を森健さんというジャーナリストの方が『祈りと経営—ヤマト「宅急便の父」が闘っていたもの』というルポを書いておられるのですが、最近その本を読みました。とても良い本です。この小倉さんは人間的にも大変尊敬されていた方で、障害者雇用にも道を開き、第一線を退いた後も私財を投じて福祉財団を造ったりされたのですが、実はとても試練の多い中を歩まれたのです。多くのことは語れませんが、奥様がまだ 60 歳に

なる手前で、熱心なカトリック教徒でもありましたが、狭心症でずっとニトロを手放さず、最期は自死と思われるご様子で亡くられました。しばらくは、小倉昌男さんは憔悴したように力を落とされていたそうです。当然でしょう。

「**キリスト者の自死**」について、長いことカトリック教会では大きな罪であると捉えられてきました。しかし、20世紀後半の第二バチカン公開後以降、その理解に変化が与えられました。この本の中で、森さんが、当時ご夫妻が通っておられた教会の神父に取材し、「自死」について尋ねましたら、その神父はこのように話されたと言います。—「人間は生まれたら生きたいと望むのが本性です。自殺は死ぬほどの苦しみから逃れたかった行為。それは病気の証拠、病死だったという理解です。そこで教会は、自ら亡くなった方に寄り添えずに申し訳なかったと考え、その人が永遠の救いを得られるように祈るのです」と。

私たちはこのような時、自分を責めたり自分を許せないようなこと、また死んだ方を断罪してしまうことがあるかも知れません。けれども、人間は弱いのです。人間は日々変化するんです。好むと好まざるとにかかわらず。心も病むのです。様々な状況が重なると、人は自分で自分を保たなくなるでしょう。人間とはそのように「**病む者**」だと受け止めることは大事なことのようになります。…この小倉さんは、玲子さんを失ってほんの1年後位にヤマト運輸で講演会をし、ご自分の経営哲学を語っているのですが、その講演のタイトルに「**変わるべきものと変わらべからざるもの**」という副題を付けました。それは、有名なアメリカの神学者R・ニーバーの祈りの言葉を思いながら付けたものであるようです。森さんは、その祈りを、小倉さんはいつも胸の中に刻んでいたに相違ないと考えています。

「**神よ 変えることができるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受け容れるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを識別する知恵を与えたまえ**」——私はこの祈りこそが、人生は結局刹那（束の間）ではないのかと迫りながらも、上を向けさせようとする「**コヘレトの言葉**」が告げるメッセージではないだろうかと思いました。私たちが自分の命の根拠を見失い、空しさと絶望の闇に覆われてしまう時の光のような言葉だと思えるのです。

### [3] 永遠に変わらない方に委ねよう

コヘレトの言葉を語る人は、一見周りの者達から羨望されていたと思います。知恵も名声もある。経済も困っていなかったでしょう。けれどその心は「**何と空しいことか**」(1:2) また「**私は生きることをいとう**」とさえ言っています(2:15)。

旧約聖書は、ここ止まりなのです。しかしここで終わっていたら、どこに希望があるのでしょうか？ 実は旧約の中にはトンネルの向こうから光がさしている所があります。それがメシア（救い主の訪れ）預言です。その中でも最たる預言はイザヤ書の 53 章だと言われています。その中にこういう一節があります。「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ 多くの痛みを負い、病を知っている」(53:3)。

ここで預言されている存在は、傍からみて全く絶望的な存在です。人々の軽蔑と嘲笑い、そしてまるでゴミのように捨てられる。美しい姿はない。しかし、このお方は、使命を持っておられると。それは「多くの痛みを負い、病を知っている」ということだと。—この方は、私たちの病、それは風邪とかウィルスとかそういうこと以上に、「病」そのものを背負って下さる存在として、必ずお出でになるという神様の約束です。あのイエス・キリストが、その人です。

思い起こして下さい。このお方は、何と十字架でおっしゃったか。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」。(マタイ 27:46) …私たちが捨てられない代わりに、この方が、神様に捨てられる絶望、空しさを引き受けて下さったのですね。それはまた、私たちが生涯の終りの日に、イエス様の最期の言葉を私たちが言えるようになるためだとも言えます。それは「父よ、私の霊を御手に委ねます」(ルカ 23:46) という祈りです。この祈りを、私たちは祈れるのです！ そうしたらもう私たちは空しくない筈です。病を持つ私たち、自分で自分を制御できない私たちを、「永遠に変わらない方」が私たちを丸ごと受け止めて下さる、その確かな道筋をイエス様が十字架の上で作って下さったのですから！

考えてみたら、「空しい」というのは自己完結しているからなのです。愛する人として「空しい」と言ったら、その相手の人の愛を疑っていることになりませんか？ 私たちは疑ってしまうのです。「本当に？ こんな私で本当にいいの？」と。いいのです！ 十字架が答えです。あなたが生きているようでいて、実はもう私があるあなたの中に宿って生きているのですよ、そこに新しい命がもう始まっているのですよと、今日も主はと招いておられます。この方を仰いでいきましょう。

お祈り致します。神様、私たちの心の中には、得体の知れないものがあって、自分ではどうすることも出来ないのです。けれども、そのような私たちの心の奥底に主の光が差し込んでいます。いや、その闇の中にさえあなたは私たちと共にいて下さいます。それが救いです。平安です。どうぞ、今週もあなたとの関わり

の中に生きていくことが出来ますよう、私たちをお支え下さい。今、試練の中にある方をお守り下さい。主イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。